

Book Review

ライフステージに応じたインプラント補綴 「人生90年時代」を見据えた診断と設計

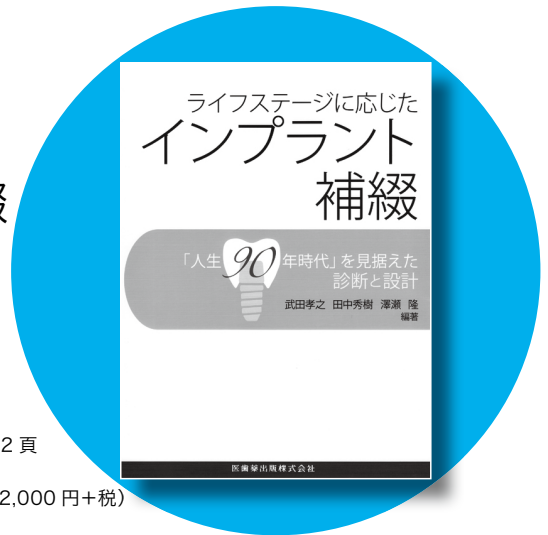
武田孝之・田中秀樹・澤瀬 隆 編著



Reviewer

宮地建夫 Tateo Miyachi
(東京都・歯科診療室新宿 NS)

A4判変, 152頁
オールカラー
定価(本体12,000円+税)
医歯薬出版刊



インプラントも「薬」と同様に、適切な処方が必要だ。インプラントは間違いなく「強い薬」であろう。その効き目は強力だが、副作用も強い。一方、患者が嫌なら自由に外せる義歯はその点「漢方薬」に近く、副作用も穏やかだ。そして、強い薬は使い方を誤ると毒ともなる。本書『ライフステージに応じたインプラント補綴』は、インプラントを「投薬」するときの優れた「処方箋」に似ている。「処方箋を書く前」に押さえておくべき心得帳と言えるかもしれない。そうみると、本書の核心が掴める。

本書ではまず処方箋を書く前に「欠損歯列症」をどのような病態と見るべきかを、研究や経験の裏付けに添って解説してくれる。なにが病態の本質か、その病期や転帰について検証している。インプラントは、ややもすれば外科的技術論や上部の補綴的構造に関心が集まりやすいが、ここではあえてそこに深入りはしない。代わりに、経年変化を問題にしている。どのような病態の変化に目を向け、その予後を見

極め、インプラントになにを期待して処方されるべきか、臨床的目線で真摯に問い解説している点が、他の追従を許さない本書の魅力になっている。

治る、治すとはなにか、ということを問い続けると、「欠損歯列症」はまさに永遠に坂道を転がり続ける慢性疾患であり、その後に抱える機能障害も含めて、「いずれにせよ治ることはない」との思いが浮かぶ。治らない病気と強い薬の両者は、どうみても相性がいいわけではない。つまり、はじめから二律背反を抱えているのではないだろうか。だからこそ慎重に、何十年かにわたってこの慢性疾患に対してどのように折り合いをつけながら関わっていくのかが問われてくる。「処方箋」が重要となる背景がそこにある。治らない病気と強い薬の両者とを見事なまでに折り合いをつけた、あるいは折り合いをつけつつあるプロセスを示した「処方箋」、それが本書だと思う。本書を著すには相当の経験が必要だっただろう。痛い目にもあっただろう。従来への思考の枠組みを乗り越える勇気も必

要だったに違いない。

歯科医療のあり方は、材料や補綴方法の進歩によって大きく影響を受ける。手段だったはずの補綴が歯科の本質部分を強く揺さぶり、歯科診断学にも大きな変革を迫る。そうして、手段が後ろから目的を煽るように歯科医療は進展してきた歴史がある。本書を読むとインプラントという補綴方法の成熟が、今また欠損歯列の診断・評価のありようを塗り替えようとしていることに気づく。医師が書いた処方箋は薬局を通して薬剤が患者に渡るが、薬局を兼ねる歯科臨床では、処方箋のオーダー先は術者、つまり自分自身になる。だから、本書の著者たちは自分たちのインプラントから学んだ疾病観を提示しながら、もはや診断学の範囲を超えて、読者個々の「疾病観・医療観」を問うていることになる。そう思うと本書は歯科医療概論の再スタート、その新しい第1ページ目なのではないかと気づく。次代を担う若き歯科医には、ぜひそのページを含め熟読してもらいたい。